

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：41603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381109

研究課題名(和文) 福島県いわき市における震災後の保育の現状と課題

研究課題名(英文) The current state and problem of the nurture after an earthquake disaster in Iwaki, Fukushima

研究代表者

前 正七生 (Mae, Masanao)

いわき短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：70337864

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災後数年が経過した福島県いわき市における保育・幼児教育の実際と課題について、アンケートでない直接の聞き取りによって明らかにした。その内実は、主として以下の3点に収斂される。震災直後の保育の実態、数年が経過する中で子どもの遊びや保護者との関係性の変化、日々の保育の現実、震災直後から時間が経った現在(震災3,4年後)における保育の実際と課題。調査の結果、規範が揺らぎ、混迷と不安のなかであって、子ども・職員の安全を慮った園長の存在、保護者への安心が合意形成の工夫によってなされていた現実が明らかになった。また、共同体再生の過程で生じている新たな課題・問題の存在も確認できた。

研究成果の概要(英文)：This study made it clear by the direct hearing which isn't a questionnaire about actual condition of nurture and child education and a problem in Iwaki-shi, where several years have passed after an eastern Japan great earthquake.

The result is mainly contracted by the following 3 points. (1) Actual condition and problem of the reality of the nurture, (2) just after the earthquake disaster are the backlash of the child and relationship with parents while several years have passed, and present when time has passed from daily actuality of nurture (3) Actual condition of nurture and problem in present when time has passed, A model was shaken and confusion, existence of the principal who considered safety of a child and a staff in the worrying inside and the actuality by which relief to a parent was formed out of a device of consensus building became clear.

The existence of the new problem and problem which have formed by the process of the collective revival could also be confirmed.

研究分野：教育学(教育史) 保育士養成

キーワード：東日本大震災 保育の質 保育士養成 ナラティブ

### 1. 研究開始当初の背景

東日本大震災後、多くの学術団体が福島県とその住民に対するアンケートの形で幼児教育や保育の実態に関して調査を試みてきた。しかしながら未曾有の大震災直後であったこと、そして放射線に代表される「見えないものへの不安」の影響もあって回答数も芳しくなく、十分なデータ・調査に至っていないとの報告もあった。(例えば、日本保育学会による2011年の調査、2012年度、震災関連の研究)

無論、現時点でも各教育学系の学会や保育士養成協議会などの全国的な組織・団体においてもシンポジウムやラウンドテーブルなど「震災後の」保育と幼児教育に関する篤実な試みは継続されているが、いずれも福島県内でない「外部」主導によるのが現状である。(厳しく言えばその結果も、アンケート等に辟易し「語る言葉すらない」状況にある被災地内部の方々への心情を鑑みていなかったが故の「帰結」とも言える。)一方で内部、即ち福島県側の研究者からの発信といえば、大宮勇雄ら「福島大学東日本大震災総合支援プロジェクト：緊急の調査研究課題」による「震災後の保育現場が直面する課題とその対応事例に関する調査研究」(2011)があるが、震災一年に満たない期間(5月)での大綱的で広範なアンケート調査であるが故に、直面している課題と対応策の掌握に関する量的研究の傾向が強い。上記の学術的背景を踏まえても本研究の意義は主に以下の3点にある。被災地の外部ではない「内部からの発信」、即ち被災地域にある養成校と実際に地域に住む研究者の手による調査研究という点。震災直後から保育現場が早急に取り組んできたこと、それがこの2年余で如何に変化してきたのかについて時系列的に追い、現場の対応とその時々々の課題、実際の取り組みと要求の変化を整理すること。大震災発生以後の、保育士にとって心理的な緊張の伴う場面の増加、また、緊急時などの地域の実情に合わせた保護者との対応や連携が求められるケース等、予測し得ない不安や変化に保育者が直面する事態が多くなっている地域の養成校として、そのこと自体へのケア、即ち「保育者支援」にかかわる新たなアプローチとしての「傾聴」的役割を込めた対話的なフィールドワークの試みである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、東日本大震災後二年余りの福島県、特にいわき市における保育園、幼稚園の実態について、実践者および幼児教育・保育関係者の証言と「語り(narrative)」による現状把握とその整理を行うことにある。その上で、より実践的な視点と「臨床的」な見地に基つき保育・幼児教育の場が直面している(或いは直面してきた)プラグマティック且つプラクティカルな課題について明らかにすることが最終的な目的である。

震災直後からのこの一年半余、幾つのも学術団体が行いつつも十分な成果を得られなかった「(福島県に対する)アンケート形式」の調査でない実際のフィールドワークとヒアリングによって、震災後、今日までの保育者の経験と意思を集約・整理することを通じて、いわき市における未来の保育を考える縁(よすが)としたいと考える。尚、本研究は「外部ではない」被災地内部からの発信という点にその最大の意義を据えている。

### 3. 研究の方法

いわき市内の公・私立保育園に対しヒアリングを行う。ヒアリングの方法・形式はアンケートに抛らず、園長・主任クラスへの直接の面談法およびフォルドワーク的な「聞き取り」である。予定としてはひとり1~2時間程度の面談、補足的には後日送付の記述での回答や再訪問も考慮に入れて、丁寧な記述と震災時から調査日までの回答者の心象にも十分配慮した記録を行う。

その際、記録というよりも社会構成主義的な「語り」を重視し、対話的で「ナラティブ」なヒアリング・記述を意識して行った。尚、聞き取りの内容の主な柱・項目は以下の10項目。

2011.3.11.震災直後の各園、実際の保育臨床における対応と安全管理の現実、そこに存在していた不安・問題について。

当初の不安や問題点がこの2年間でどのように質的に変化し現時点では捉え直せるのか、震災後の過程で新たに生じてきた問題・課題について。

巨大地震直後、津波等「放射線」に限らない地域の保育者の対応と判断、危機管理の実際、緊急時を如何に切り抜けたかに関して。

その後の「放射線」対策や新たな不安について、その保育内容と子どもの発達、経験(奪われている体験・経験)という視点からの聞き取り。

緊急時の現場と行政機関との迅速な連携、子どもにとっての真の安全管理に関するシステマ的なモデル構築に繋がるような内容について。

震災後2年間に亘る、保護者との連携や保育実践の中で生まれてきた新たな試みや工夫、保育を作る上で考えてきたこと、保育活動と保育経過の事例。

保育者としての自己と個としての自己のバランスの維持。他者との意見の相違や見解・価値観に関して受けたストレス等について。

保育者としての矜持、専門職としての自負など。

子ども、地域の保育機能の再生に対する思いや関心。

保護者との対応の中で生じたこと・思い、その他。

### 4. 研究成果

東日本大震災後、数年が経過した福島県いわき市における保育・幼児教育の実際と課題について、アンケートでない直接の聞き取りによって明らかにした。その内実は、大きく分けて以下の3点に収斂される。(1)震災直後の保育の実態・実情、(2)数年が経過する中で子どもの遊びや保護者との関係性、日々の保育の現実とその変化、(3)震災直後から時間が経った現在(震災後3,4年経過)における保育の実際と課題。

調査の結果、規範が揺らぎ、混迷と不安のなかであって、子ども・職員の安全を慮った園長、保護者への安心が合意形成の工夫によってなされていた現実が明らかになった。また、共同体再生の過程で「新たな課題」・問題の存在も明らかになった。

(1)初年度はヒアリングを行う上で地域の復興の事情や各園の状況、保育者の心情や保育の実際に配慮するために、調査研究を行う前の理念的・理論的な枠組み提示を入念に行った。その過程では、地域のリスクガバナンスや被災地の「内 外」の語りに関する温度差について慎重な検討をおこない、ヒアリングを受ける側としての園と養成校の目指すものの同異、保育の実際における園ごとの語りの温度差といったものを如何に考慮するかなど、聞き取りの中で生じうる齟齬を可能な限り社会理論的に整理し、被災地の保育者養成として採り得る現実的なスタンスを明らかに出来た。

それにより、実習園であるいわき市内の保育園・幼稚園各園の震災後の現状と課題、その地域性について保育実践者の「語り」を中心に整理すること、そのために必要かつその作業に伴う研究の枠組みをより具体的に提示できた。また、枠組みを明らかにする過程において、震災後、現時点での学生たちを形成している文化的基盤「メディアを通じての情報の受容と学術的(アカデミック)な「知」に向けられたまなざし」とのかかわりからも「地域の保育実践を担う」学生にとって、養成(課程)段階で必須と思われる資質と姿勢について考察もでき、かなりの進捗を示すことができた。

市内の保育園、特に幼稚園に関しては未だ聞き取りのサンプル自体が少なく、未だ課題の全体像が見えにくい現状にはあるが、今後もひとつひとつの「語り」から、いわき市の保育園・幼稚園が直面し、且つ抱えてきた現実の課題や悩み、心情といったものをより精緻に探り、分析する一つの視点や方向性、その枠組に関してかなり明確なものが見えてきている。まだ、数値的に明らかにできる段階ではないが、子どもの減少やコミュニティの変容、それに伴う人口動態、保育者の確保の困難性という新たな現実がみえてきたことも大きな成果であった。

(2)二年目は、いわき市の公立私立保育園・幼稚園の現職保育者からの継続的なヒアリング、語りを行なった。実際には保育者養

成校である短大と実習園であり、一方でコミュニティの親を支える保育臨床の毎日を、養成校と「保育臨床の場」それぞれの課題、視点からさらなる整理が進んだ。

諸事情により若干ヒアリングの地域的な偏りと未達成な部分が生じたが、実習訪問指導などの学内業務と並行、連動しながら市内の保育園・幼稚園への協力要請で対応し、再度のヒアリング、より深い聞き取り(追加のヒアリング)で補完、充実できる内容も明確になった。例えば、地域の保育の柱となって、震災後イレギュラーな状況を支えてきた保育園、その主任保育士などからのより詳細な聞き取りを行った。

本研究の第3の目標でもある「地域の園に対するヒアリングによる傾聴」、「ストレス等の緩和的な役割としてのヒアリング」についても、地域唯一の養成校として、実習などの関係性からも、地域と本務校の信頼性がより高まる方向で推移している。

(3)最終年度は、前年度までの現職保育士・幼稚園教諭、OB・OG等の卒業生だけでなく震災直後から最前線で重要な役割を担い、混乱と不安の中で地域の子ども達や保護者、そして職員を守りながら震災後の5年余り保育の現実に向き合ってきた園長、所長からこの数年で明らかになってきたいわき市、ひいては福島県の保育と子育ての実際における課題と方向性について聞き取りを行った。

その際、とりわけ震災後の経験と実践から漢字見えてきたもの・ことをできるだけありのままの語りとして記録することを試みた。そこでは地域の保育、子育てへの影響は個人的・家庭レベルなものを超えて、コミュニティ全体の変容がもたらしているものの影響が濃いこと、特にいわき市の場合、震災後の人口流入・流出によるコミュニティの変化が子ども達に影響を及ぼしていること、それに加えて親の生活基盤と人間関係の変化が敏感な子ども達により大きな影響を及ぼしているのではないかとの声もあった。

同時に、保育幼児教育の最前線にいる幼稚園、保育所の担任、主任、園長らからは「震災直後に生まれた子どもたち(現在の4歳児、5歳児)が特にあていしない、落ち着かない」「気になる子たちが多い」との見解が非常に多くみられた。「何よりも親の不安や悩み、先行きの見えなさに疲れた」保護者の存在、「家庭内の関係、地域での人間関係などのバランスを崩した人たちが、子どもの育ちに少なからず影響を与えていると思う...」との声もあった。

(4)補足的なデータとして北海道や他地域に避難した保護者、親子へのヒアリングや北海道に避難した方々を支えるNPO団体の代表らにもヒアリングを行った。ヒアリングでは地域を変えたことからたらされた新たな不安(子どもの生活や育ちのための文化が急変したことで、親子共に空白、無気力

のような日々があった等)と生活面での物理的な悩みが継続する現実、実家が福島にあることで帰省に際しての悩みなども聞き取ることができた。

(5)以下は、いくつかのヒアリング項目に関する「語り」の一部・抜粋である。

質問項目 「子ども、地域の保育機能の再生に対する思いや関心」に纏わる「語り」  
・実習でも、家庭が不安定な子どもが多いって聞いた。保育所が中心になって保護者が安心して仕事できたり、子育てできたりする、遊びでも何でも、「困ったら保育園に行けばいい……」ってくらいの役割を保育園や幼稚園が持てると思う。それなら働く私たちも自信というか、誇りも持てるし、子育てや保育が復興の柱の一つになれるような気もする。もっと「専門性」を高めて、頑張りたい!!って思えるような保育者になりたいし、園の先生たちも、もっともっと勉強しないとこれからの子どもたちは育ててあげられないよ!と、叱咤激励された。

・運動場所の開放、確保。ある時間帯だけでも部分的な公共施設の開放は必要なんじゃないかなと思う。やっぱり遊び場は個人じゃ確保できないし、場所も借りたりできないし。  
・コミュニティの再生。避難やいわき市の人口流入で雰囲気以前と違うなって思うこともある。みんながお互いをもう少し信頼して、助け合うような雰囲気が街全体に必要かも。なんか他人のことばかり羨ましがったり、自分はダメだって逆に卑下したり……。もっとこう自然に、他人にやさしくなればいいと思うんだけど。ギスギスしないで、楽しいことの多い明るい街にしたい。それが、「楽しいことが大好き」な、子どもたちにとって一番だと思う。

質問項目 「自分の親、親戚、保護者との対応について等で生じたこと・思いがあれば。」  
・実習園で、震災後の二年くらいまでは、給食だけでなく行事や遊びに色々言ってくる親が多かったみたいだけど、最近は少し減ったって聞いた。でも、先生に訊いたら明らかに「個人差」なんだって。震災直後も水遊びでも「いやいや、いいよ……」「気にしないので構いません」っていう親がいるかと思ったら、「水に触れさせないで」「給食も要らない」「外遊びはさせないで」って敏感に反応する親もいたって。

・震災もあったけど、それは単にきっかけというか、人間の神経がむき出しになった機会なのかもって……。どうとらえるかは個人の勝手だし、親が育ててるんだけど、保育者も子どもみてるんだから、協同っていうか一緒に一人の子ども育ててる「仲間」じゃん。そういう親って、気持ちはわかるけど共感性ないっていうか「背負い込む」タイプなんだと思う。ホントに、保育って「協働」だと思う。

質問項目 「これから勉強したいこと、もっと知りたいこと、必要だと思うこと何か？」  
・子どもたちにとって「よい」ことなら何でも知りたいという意欲というか、気持ちは沸いてきている。自分は放射線や原子力の専門家、医者ではないから、「一般的に」言われていることからしかできない。でも、子どもたちの側で、毎日、ひとつひとつの子どもたちの目の前に起きていることに共感して、自分も同じことをやるなかで丁寧に気を付けてあげる、支えてあげることはできる。

・子どもにとっての必要な経験を「じっくり考え」、準備できる発想・想像力と創造性。保護者の不安を受け止められるような共感する力。その意味では心理学や相談支援的な勉強ももっと必要だし、表面ではなくて、一人ひとりの子どもをみる目を養いたい。震災によって生じた複雑な家庭の事情、保護者の思いや悩みをじっくり丁寧に聴いて向き合える気持ちや技術を経験のなかで身に付けていきたい。

最終年度を経た聞き取りによる具体的な成果は大まかに以下の四点である。

震災後2年目半ば頃から震災前の保育を意識しつつも地域の人口の移動、食や遊びの空間に関する制限との葛藤の中で、各園がその独自性において保護者との合意形成を模索していた現実があったこと。

地域内の人口移動、流入出と相俟って、表面上とは異なる不安を抱えた保護者(と若手保育者)に対する配慮の下でベテランの保育者が奮闘していたこと。

園内での遊びの変化だけでなく生活における全体的な不安、特に親の不安定さが繊細な子どもたちにシンクロするような現状の中、依然とは異なる子どもの存在が目につくようになったとの声が多くあったこと。

当初の研究目的に掲げた地域の養成校として、震災後の地域の保育を担ってきた保育者に対するヒアリングを通じて、「語り聴く」を通じてのカタルシス(癒しと協働)という目的もかなりの水準で達成できた。それは実習訪問指導時以外にも機会を設け、恒常的に対話を重ねられたことは園側にとっての現実を整理し「聞いてほしいこと」や「考える機会」の提供と現状追認でない主体的な思考と関係を創り上げることに繋がった。

5. 主な発表論文等(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6件)

前 正七生、「フクシマにおける「臨床」としての「語り(ナラティブ)」、『研究 東洋』東日本国際大学 東洋思想研究所・儒学文化研究所編 :5号、2015、ページ :58-74、査読有

前正七生、「福島県いわき市における震災後の保育士養成の現状と課題」『いわき短期大学紀要』いわき短期大学幼児教育科  
巻：第48号、2015、ページ：17-31 査読無

前正七生、小坂徹、金珉呈「保育者養成における地域・文化的基盤と規範同調性 震災後のメディアリテラシーと"内 外"の"語りを中心に」『いわき短期大学紀要』47号、2014年、ページ：1-23 査読有

前正七生「保育者養成における地域・文化的基盤と「規範同調性」」全国保育士養成協議会『保育士養成セミナー第52回研究発表論集』巻52、ページ：212-213 査読無

鈴木隆次郎、金珉呈、前正七生、「学生の主体性を育む保育実習指導に関する実践報告」保育士養成協議会第54回研究論集巻54、ページ：78 査読無

前正七生、金珉呈、「学生の主体性を育む「保育実習指導」に関する実践報告-学生の主体的な学びと思考、「合意形成」を中心に-」『いわき短期大学研究紀要』第49号、2016、ページ：93-107(報告)

〔学会発表〕(計 4件)

「福島県いわき市における震災後の保育士養成の現状と課題 学生の語りと主体に関する考察」全国保育士養成協議会保育士養成セミナー第53回研究大会(福岡)  
年月日 2014-09-17 - 2014-09-18

「保育者養成における地域・文化的基盤と規範同調性」全国保育士養成協議会保育士養成セミナー第52回大会(高松市)  
年月日 2013-09-04-2013-09-05

「学生の主体性を育む保育実習指導に関する実践報告」保育士養成協議会第54回研究大会(札幌市) 2015-9-23

「フクシマの子どもたち」札幌月寒教会CS、黎明幼稚園特別講演会「福島の話を聴こう」札幌黎明幼稚園招待講演

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：  
  
〔その他〕  
ホームページ等：なし

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
前正七生 (MAE, Masanao) いわき短期大学・幼児教育科・准教授  
研究者番号：70337864

(2) 研究分担者  
小坂 徹 (KOSAKA, Toru)・東北福祉大学・総合福祉学部・社会福祉学科・教授  
研究者番号：30258834

金 ミンジョン (Kim, Minjeong)  
いわき短期大学・幼児教育科・講師  
研究者番号：30610563

常深 浩平 (TUNEM, I Kohei)  
いわき短期大学・幼児教育科・講師  
研究者番号：90645409

鈴木 まゆみ (SUZUKI, Mayumi)  
いわき短期大学・幼児教育科・教授  
研究者番号：20341745

橋浦 孝明 (HASHIURA, Takaaki)  
いわき短期大学・幼児教育科・講師  
研究者番号：20649991

鈴木 隆次郎 (SUZUKI, Ryujiro)  
いわき短期大学・幼児教育科・講師  
研究者番号：20516330

及川 千都子 (OIKAWA, Chizuko)  
いわき短期大学・幼児教育科・講師  
研究者番号：70650018